

悠久の京を訪ねて

Vol.6



京は古より人々が集い、その気候・風土を織り交ぜ、日本の中心地として生活が営まれてきました。それは京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのかを知ることは、これからの生活を考える上でも重要な事だと言えます。出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

あつえ 温江遺跡の人面付き土器 — 不思議な容貌をした土製品

人面付き土器とは何？

縄文時代の土偶、古墳時代の人物埴輪はよく知られていますが、弥生時代にも人物を模した土製品があります。その一つに、人面付き土器があります。

温江遺跡出土の人面付き土器は高さ8.5cmで、首より下は割れてなくなっています。割れ口から、壺の口に付けられていたと推定されます。同時に出土した土器から、弥生時代前期に作られたものと思われます。このような土製品は西日本で10例も出土していない珍しいもので、おそらく大事な物を入れた壺を飾っていたのでしょう。

何を模したのだろうか？

一見して特徴的なのが、頭頂部に付けられた突起です。ウルトラマンやビリケンさんを彷彿とさせる顔・形です。

この突起が何を表現しているのかはよくわかりません。モヒカン刈りや棒状の髻むすを載せたように見えますので、当時の髪形を模したという考えがあります。しかし髪形だとすると、突起が表現されているだけで、やや不自然な感じを受けます。また、とさかのように見えますので、鳥を模したという考えもあります。弥生時代には銅鐸どうたくや土器にサギの絵や「鳥のかぶ

京都府与謝郡与謝野町



り物」をした司祭しさいの絵が描かれています。この人面付き土器もこれらと同じく、農耕のうこうの祭に関連したものと考えられています。とさかと言えば鶏ですが、この土製品が作られた時代にはまだ日本では鶏が飼われていませんでした。

今もって、謎の土製品と言えます。皆さんには何に見えるのでしょうか。



温江遺跡から出土した人面付き土器